コロレンコのゴーリキー宛て書簡　　（訳・村野克明）

――1921 年 8 月 9 日、ウクライナのポルタワ市から――

2022 年 2 月 24 日のウクライナ侵攻直後、首都キーウ（キエフ）近くのジトミル市にもロシア軍のミサイルが撃ち込まれた。作家ヴラジーミル・コロレンコ（1853.7.27-1921.12.25）生誕の地だ。父はウクライナ人、母はポーランド人だが、息子の本人は生涯ロシア語で執筆した。1917 年ロシア革命以後の内戦期にはウクライナ北東部のポルタワ市にあって、目まぐるしく変る市政権下で多くの人権侵害に抗議し、不当に拘留された人々の救助に奔走し、裁判なき銃殺刑に抗議の声を挙げ続けた。以下、作家最晩年の、ゴーリキー（1868-1936）宛て書簡を掲げる。（若き日のゴーリキーの文学上の師匠がコロレンコ）。

出典は『革命と内戦期のコロレンコ　1917-1921 年　伝記の記録』（ネグレトフ編、1985 年、米国、チャリッゼ社刊）350-358 頁。手紙の日付は 1921 年 8 月 9 日。当時、旧ロシア帝国領内、ことにヴォルガ流域、ウクライナ南部、西シベリアで飢饉が猖獗を極めていた。

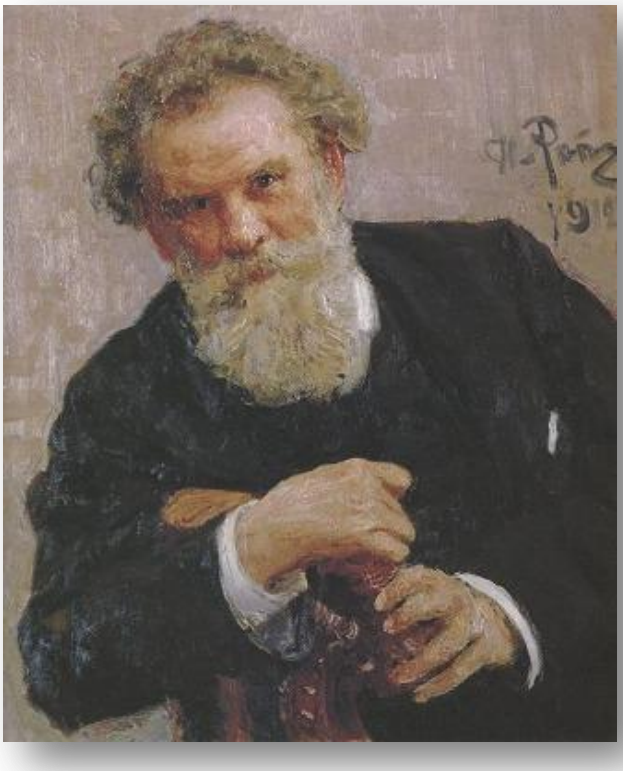
以下は、ロシア語からの翻訳。〔　〕内と後註とは、訳者による。

文中の「ボリシェヴィキ」とはレーニンを党首とするロシア社会民主労働党左派（のちのソ連共産党）の別称。

親愛なるアレクセイ・マクシーモヴィチ！

ロシアの飢饉に苦しむ人々への支援をヨーロッパに訴える声明文を書いてほしい、というあなたの申し出を私は引き受けたわけだが、実は、その時分から、安静とはほど遠い状態が続いている。ペンを握っている今も、不眠症の真夜中を漂っている次第だ。

何よりも、飢饉に関する数字の資料がない。すでに友人の統計学者らに頼んではいるが、時間が必要だ。つまり、待たなければならない。以前、『飢饉の年』（1893 年発表）執筆時には、私自身が当



該地域で収集した生活資料をふんだんに使うことができた。今度も、そうした生活資料で私の脳裡が一杯になり、安静な夜を過すどころではなくなる時期が来るだろう、と思いたいところだが、果たしてそんなことになるものやら。

この間、ウェルズがあなたのところを訪れたあと、本を出した（註１）。その本の主旨に私は全く賛成する。だが、亡命ロシア人にも当地の政府にもこの本は容認されなかった。

亡命ロシア人の編集部は否定的な序文を付し、当方の検閲は全くの禁書扱いにした。亡命ロシア人からみれば、ウェルズはロシアの支配政党に対して余りにも好意的な態度をとっている。一方、ボリシェヴィキにとって、あの本にはロシアへの軽蔑心が漲っている。周知のごとく、ロシアは世界社会革命のに立っている、そのような国に対してこの軽蔑ぶ

りはまことにケシカラン、というわけだ。

ウェルズの文章を読み通してみて、この英国人はどうしてこんなにも正確にロシアの現状を理解できたのか、と驚いた。が、そういう私にしても、わが祖国へのあの軽蔑心には我慢がならず、何度も、あの本を投げ捨てたくなったものだ。いわく、政府で働いているのは真面目だが愚直な人々で、ナロード（註 2）は……。ナロードの方は何をかいわんや。しかし、最終的に私はウェルズを理解するし、その意見は甘受する。

ただし、どんなナロードも既存の政府にふさわしいものとなろうとする、という意見は問題だ。もちろん、その政府がナロードによって打倒されるまでの時間枠での話だが。いわく、ロシアはツァリーズムを倒した（註 3）。これに異存はなし。だが、この事実は、ロシアが飛躍を遂げ、全ヨーロッパを凌駕し、社会革命の先頭に立った、ということを意味するのか。否、と私は思う。そんな奇跡はミーティングの場だけにある。ロシアによって覆されたのはツァリーズムだけである。そうでなくとも、ナロードはあまりにも長い間、ツァリーズムに我慢に我慢を強いられてきたのだから。

歴史はロシアに大変悪い冗談を仕出かしたものだ。ロシアはあまりにも長く無能な政府を許して服従してきた。政府は、国を「あらゆる政治的な自主的活動の外に」置いてきた。旧体制は盲目的で、自らの「貴族階級の独裁」が、ただ盲目的な敵意のみを増大させてきたことに気づきもしなかった。旧体制は軍隊の盲目的服従を当てにしていたが、その軍隊が同じナロードから生れたものであること、服従は必ずしも盲目的ではない、ということを忘れていた。挙句の果てが、その軍隊による旧体制の打倒、である。

だが、ここから何が生まれたのか。政治的目標を失ったナロードがすぐさま飛び付いたその相手は、権力の鞭を最初に握った者、であった。それがコミュニストだったのだ。コミュニストは、長い間に熟成された敵意を満足させることにより、ナロードの気分を支配した。しかし、問題は敵意に存したのではない。そうではなく、出来るだけ早急にと生活を新しい軌道に載せねばならなかった、という点が問題だったのだ。

あなたにはすでにココーシキン・シンガリョーフ殺害事件（註 4）の件で手紙を出し、私の見解を表明した。事件の打開に少しでも有効に働くならば、との思いがあったから。あれこそ、憎悪の膨張がもたらした事件だ。残念ながら、今まで私は同様の出来事をたくさん見てきた。ナロードのごく勤労な部分が根絶やしにされてきたということだ。以下、そのありふれたケースを少し挙げておく。

一昨年の復活祭の時、市立公園にいた私のところへ、まだ若い人が近づいてきて、私とちょっと話し合ってもよいか、と許可を求めた。その際に彼氏は、自分の兄貴がささやかなあやまちを犯した、略奪目的で或る人物が狂暴に殺害された事件に兄貴が加わっていたことが発覚したのだ、と伝えた。

「あやまちっていうが、どんな？」

「ものを知らない、教養のない人間なんです。僕はこんなことはやらないし、あなただってそうでしょう。だけど、ものを知らない人間だから、やらかしてしまったんです。」

私は、略奪殺人という「ささやかなあやまち」を犯したその兄貴のために奔走することを、きっぱりと断った。そして、弁護士に相談したらどうか、と助言した。私は、その兄貴には何も悲劇的なことは起こるまい、と確信していたが、事実、無罪放免となった。たぶん、今もどこかで、同様の「ささやかなあやまち」を犯していることだろう。

1919 年４月、私のところへ、ポルタワ郡バイラカ郷ゴルトワ村から、一人の女性がやってきて、次のように語った。

ゴルトワ村の近くに二人の赤軍兵士が住んでいて、名をグジーとクラフチェンコといった。二人は村にやって来て一群の人々を逮捕したが、その中にザハーリー・クチェレンコも含まれていた。クチェレンコ家での捜索の際に、紙幣で 500 ルーブル、銀貨で 35 ルーブルが見つかった。二人は、逮捕者を村から連れ出したあと、クチェレンコだけを除く全員の解放を決定した。その後、クチェレンコは行方不明となり、まもなく、殺された姿で沼地から発見された。

この事件に心底から憤慨した私はチェーカー（註 5）に赴き、重要な活動家の一人と面会し、あなたたちの手先には強盗どもがいる、と伝えた。相手は、この知らせに対してかなり冷ややかな態度で応じた。仮に、この幹部が公用電話を用いて、グジーかクラフチェンコのどちらかを逮捕しようとして現地に連絡を取ったとしても、その場合には、容疑者は前線へ行ってしまった、という返事が来ただけだったろう。もう一人を逮捕しようとしても、言わずもがなの結果となったはずだ。だが、私としては、そんなことで満足せねばならなかったろう。しかし、現実には、殺人者と呼ばれたグジーは、前線には行かずに現地にとどまり、不平を訴えた未亡人〔夫は殺されたクチェレンコ〕をこっぴどく殴っていたのだ。

このことが証明しているのは、当時のチェーカーが殺人者どもをいかに大目にみていたか、ということだ。殺された相手が「仮想「富農」（註 6）」であったから、ということかもしれない。この哀れな未亡人は私のところへもう一度か二度やってきた。夫を探し出そうとした時に一まとまりの武器と出っくわしたそうで、このことをボリシェヴィキ当局に申し出たものかどうか、私に助言を求めに来たという。当時のチェーカーがならず者どもに対してどんな態度を取っているかを見てきた私は、正直言って、彼女の身の安全を請け負うことはできなかった。或る警官は私に向かって、チェキスト（註 7）の中には殺人者どもに警告を発していた者もいる、と言ってはいたが。そして現在の私は、この武器はすべてならず者どもの野営地にあったもの、と確信している。赤軍が戦わねばならないならず者どものことである。この哀れな未亡人女性については、その後で殺害された、と私はほぼ確信する。以後、一度も私のところに現れなかったから。

概して当時の私は、「裕福な人々はならず者である」とされていることを知っていた。このことにいつも驚いていた。なぜならば、裕福な人々こそ、いつもならず者どもに襲撃されていたからだ。後者は前者にとって「敵」であった。だが、裕福な人々こそ「最高のならず者」だとされた。そう吹き込む必要があったからだ。まさにそんなマイナス要因ばかりが連動しあって飢饉が生み出されたのだ。そうなるには、最も道理をわきまえ農業のことを熟知していたナロードの中でもごく勤勉な分子が迫害され殺害されてしまったことが大きい。

私の知っているケースだが、ある人物はドイツへ出かけて、かの地で農業を学んだというだけで処刑された。ドイツへ行ったのは、当該地域の農業委員会の推挙があったからなのだが。私は彼のために奔走したが、救出は叶わなかった。すでに銃殺されたという回答があったのみ。ああ、彼らにはドイツで農業を学んだような活動家がいたのに、何たることか。姓をシクルピエフと言った。わがメモ帖には、シクルピエフは三人分で 15 デシャチーナ（註 8）の土地を所有、とある。ああ、農業をよく知る人々が今こそ我が国には必要な時なのに、何という事態であろうか。

私はこうした実例をいくらでも挙げることができる。裕福な人々は処刑されるか殺害されるかした。わが疑問の余地なき結論は、現在の飢饉は自然発生的なものではない、ということだ。それは過度の性急さの産物なのだ。すなわち、労働の正常な秩序が破壊されて、最悪の分子、一番の労働不能分子が前面に躍り出たのだ。そんな連中には現実は荷が重すぎたわけだが、一番の労働有能分子の方は弾圧されてしまった。今もこの状況に変化はない。もしもこれを止めなければ、来年もそれ以降も、我々は飢饉に見舞われることとなろう。

こうした「富農」撲滅運動は拒絶しなければならない。私はこの歴史を知っている。直近の郷の一つに、たいへん仕事が有能な家族が住んでいて、40 デシャチーナの土地を有していた。だが、コムネザモジ（ウクライナ貧農委員会）がその半分を没収した。大家族に残されたのは 20 デシャチーナのみとなった。だが、ともかくも、家族は他の人々よりもうまくやりくりして、周りよりも、より豊かに暮らすようになった。すると今度は、12 デシャチーナのみが残された。それでも家族は他の人々よりも、よりよい生活ぶりを発揮した。そうなると、コムネザモジにはこうした「富農」を、もうどうしたらよいかわからず、結局、この家族全員を村から追放することに決してしまった。これは最新のニュースだ。こうした措置がロシアを最終的な貧窮化に至らせないとしたら、何を意味するのか教えて

ほしいものだ。全てを均等化しようとするから、こんな始末になるのだ。

コンスタンチングラード郡にも裕福な家族があった。家業が進展するにつれて少しずつ土地と農業機械を入手していった。だが、今や、機械は分解させられ、要は、異なる農家へ配分されてしまった。機械の一部分は或る農家へ、他の部分は別の農家へというふうに。もたらされたのは零落化のみ、平等化にはあらず。こんなことは何度もあったことだ。

こうした「富農」撲滅運動のシステムは断固、拒絶しなければならない。必要なのは分別のあるクレジット〔信用貸し〕の組織化だ。クレジットにとって必要なのは＜裕福さ＞であって＜平等化＞ではない。別の言い方をすれば、猪突猛進型のコミュニズムは拒否しなければならない。一体、我が国に、道理をわきまえたコンミューンがどのくらい存在するか見てほしい、そのデータを集めてほしいものだ。そうしたら、あなたも驚くに違いない。まともなコンミューンがあまりに少ないがゆえに、全ロシアが飢餓に苦しんでいるのだ。

以上に述べたことをまとめて、こう結論づけよう。すなわち、我が国の〔ボリシェヴィキ〕政府は平等化を追求した結果、飢饉のみを得た、と。ナロードのごく仕事に有能な人々は押しつぶされて、土地を取り上げられた。今、そうして没収された土地は荒れ果てたままになっている。コムネザモジ（ウクライナ貧農委員会）とは、福利という点で特別の高みに立ったことなど一度もないナロードの一部分であるが、今、農業経営全体を牛耳っているのはコミュニスト、すなわち、農業に全く暗い理論家たちなのだ。

私は再び、繰り返す。自由へと戻らねばならない、と。多くのものがすでに駄目にさせられた。だが、何が我々を以前の物質的安定と似た状態へと戻すことができるかと言えば、それは「自由への回帰」以外にはない。まず第一に「商業の自由」へ、次に「出版の自由」「言論の自由」へと戻るべきだ。そのためには、手当たり次第に人を捕獲しないことが肝要だ（リャホーヴィチ（註 9）逮捕のように）。我々は結束し力を合わせて、我々がはまり込んだ袋小路から脱出できるように努力しなければならない。

私は、ウェルズ同様、現在の〔ボリシェヴィキ〕政府は、飢饉のために破局に襲われることがない限り、ロシアを現在の袋小路から脱出させるべく努力するように運命づけられている、と思う。繰り返しとなるが、どんなナロードも既存の政府にその身の丈を合わせようとする。すなわち、ロシアのナロードは、自己の過剰な忍耐強さのおかげで、ボリシェヴィキにふさわしいものとなっている。ボリシェヴィキはナロードを崖っぷちまで追いやった、ということだ。だが、我々は〔白衛軍の〕デニーキン軍もヴランゲリ軍（註 10）も見てきた。この人々からは、余りに地主とツァリーズムに対する愛着が感じられた。これはボリシェヴィキよりももっと質（たち）が悪い。彼らに従っていたら国は衰弱と退廃へと導き入れられていただろう。だが、「自由への転換」こそ、私が袋小路からの脱出への第一歩と考える、その条件なのだ。

もしもロシアにまだ活路があり得るとしたら、それは「自由への回帰」にのみ存する。私はすでにルナチャルスキー宛て書簡（註 11）でそう述べた。本書簡でもこうして再説した次第だ。

■初出：名田島お茶の間通信『せせらぎ』第 9 号（発行人福島みゆき、2023 年 2 月 1 日発行）。「水源地 com」の「特別寄稿」欄への転載に当たって、初出テキストに残された以下の校正ミスを補った。

（誤）〔夫は殺されたクチェンコ〕→（正）〔夫は殺されたクチェレンコ〕（Кучеренко）。

（誤）「言語の自由」→（正）「言論の自由」（свобода мнения）。

訳註　1-11　以下の註の作成に当たっては、主に『ロシア・ソ連を知る事典』（1989 年、平凡社）、『プログレッシブ　ロシア語辞典』（2015 年、小学館）、ロシア語ウィキペディア、斎藤徹訳『わが同時代人の歴史』第 3 冊（以下の註 11 参照）巻末所収の「コロレンコ年譜」を参照した。

註 1　英国の有名な SF 作家ハーバード・ジョージ・ウェルズ（1866-1946）は 1920 年 9 月末から半月ほどペトログラードのゴーリキー宅に滞在。レーニンとも会見し『影の中のロシア』と題する紀行文を〈The Sunday Express〉に連載。そのロシア語訳はコロレンコ没後の 1922 年にハリキウで刊行。

註 2　ナロードとは、①国民、人民。②民族、エスニックグループ。③大衆、民衆、庶民　のこと。石川啄木の詩「はてしなき議論の後」に「されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、‘V NAROD!’と叫び出づるものなし」とある。V NAROD とは「人民の中へ」の意味。1870 年代当時「人民」＝農民。

註 3　ツァリーズム（ツァーリ＝ロシア皇帝の支配体制）は 1917 年の二月革命で打倒された。グレゴリオ暦の 3 月に発生したが、ロシア暦の 2 月に当たることから「二月革命」と称す。

註 4　1918 年 1 月 7 日に革命的水夫たちによって私刑（リンチ）の形で、カデット（立憲民主党員）中央委員会の委員ココーシキンとシンガリョーフの二人が殺害された事件。ここから「赤色テロ」が始まった、とする見解もある。

註 5　チェーカーとは、「全ロシア反革命・サボタージュ取締非常委員会」（1917～1922 年）の地方機関の略称。

註 6　「富農」。ロシア語でクラーク。この語は「他人（貧農、小作人）を搾取する富農」を意味するが、西欧的な意味での農業資本家とは異なり、自ら農作業に従事する農民という性格を維持していた。内戦時の 1919 年に導入された食糧徴発制度から打撃を受け、1929 年秋からの全面的集団農業化運動によって壊滅させられた。

註 7　チェキストとは、上記チェーカーの勤務員のこと。

註 8　デシャチーナとは、ロシアの旧面積単位で約 1.09 ヘクタール。

註 9　コンスタンチン・リャホーヴィチ（1885-1921.4.16）のこと。1917～1921 年に、ポルタワ市の社会民主労働党（メンシェヴィキ）のリーダーを務めた。コロレンコの娘ナターリヤの夫。1921 年 3 月 17 日にチェーカーに逮捕され、獄中でチフスに感染し、4 月 16 日に死去。この出来事はコロレンコの健康をさらに悪化させた。

註 10　デニーキン軍とヴランゲリ軍。どちらも内戦時、赤軍（ボリシェヴィキ＝レーニン首班政府の労農赤軍）に対抗した「白軍」。デニーキン（1872-1947、陸軍中将）は「義勇軍」を組織し 1919 年 6 月末から同年 12 月はじめまでの 5 ヵ月余、コロレンコの住むポルタワ市を占拠した。ヴランゲリ（1878-1928、男爵）は白軍勢力最後の総司令官。ロシア南部、ウクライナ、クリミア半島方面で反革命運動を指揮。

註 11　ルナチャルスキー（1875-1933）はポルタワ市生れのロシア人革命家。1895 年ロシア社会民主労働党に入党。ソ連初代教育人民委員（教育大臣）。コロレンコの「ルナチャルスキー宛て書簡」とは、そもそもはレーニンの提案（＝教育人民委員のルナチャルスキーとコロレンコとの往復書簡）をコロレンコが受けて、書き上げた 6 通の手紙を指す。手紙は公表を約束されていたが、ルナチャルスキーは最後まで「受け取っていない」としらを切った。結局、ルナチャルスキーからの返信なしの、この 6 通の手紙のみが『ルナチャルスキー宛て書簡』として国外で公刊された。なお、この書簡には邦訳がある。

――『二つの白鳥の歌　チゥコーフスキー「M.ゴーリキーの二つの心」　/　コロレンコ「ルナチャールスキーへの手紙」』（斎藤徹訳。東京図書出版、2013 年 11 月 4 日初版発行）。

斎藤徹氏にはさらに次のコロレンコ作品の翻訳がある。

――『わが同時代人の歴史』全 4 巻（全 3 冊）（文芸社、2006 年 2～12 月初版第 1 刷発行）。これは、1853 年の誕生から 1884 年末のシベリア流刑終了までの自叙伝。

――『コロレンコ短編集』（文芸社、2008 年 10 月初版第 1 刷発行）。「目次」は以下。

ウクライナを背景とする作品：「悪にまじって」、「真夜中」、「パラドクス」。シベリアを背景とする作品：「殺し屋」、「マルーシャの農場」、「あかり」。ヴォルガ地方を背景とする作品：「川がはしゃぐ」、「才能」。作品解説。コロレンコ小伝。

（2022 年 9 月 26 日、擱筆）